

— 広 告 —

KIT
キャンパス
レポート
文・杉村裕之



福森 郁斗 (ふくもり いくと)
金沢工業大学大学院工学研究科
建築学専攻
博士前期課程二年
三重県三重高等学校出身

「壊れる」の視点に触発、 構造設計の道へ踏み出す。

「建てる」から「壊れる」へ。建築に対する福森さんの関心を百八十度変えたきっかけは、現在、指導を受ける西村督教授の研究との出会だった。

小学生の頃から建築模型が好きで、格好いい建築家を夢見ていた福森さん。高校時代、進路の参考に見たKITのサイトで、西村先生が当時手がけていた「積雪によ

る木造家屋の倒壊条件算出と補強法」に目が吸い寄せられた。「建築学科で建築デザインを学ぼうと思っていたので、『壊れる』の視点にはっとしました」。

入学後、設計演習の授業で、建築物の安全を担保する構造設計の重要性をさらに実感した。彼のデザインを見た教員から「この柱の寸法では無理」「ここに柱がないと建

たないよ」など、多くの指摘が入った。これが構造設計者へと舵を切り換え、西村研究室を選ぶ決め手となった。

現在、取り組むのは、テンセグリティーモデルの形状制御解析。この解説を尽くすには、当コラムの文字数ではとても足りない。超要約すれば、人間の骨格を模した構造体がある位置に移動する際、周囲のものに干渉しないよう、形状が変わっても剛性を保つ制御アルゴリズムを提案する研究である。

「それは実際の建築でも役立つの?」。わたしの質問は、少し意地悪だったかもしれない。しかし、「柱や梁は難しいでしょうが、例えば曲面の屋根なら」と、嫌な顔ひとつせず答えが返ってきた。後で門外漢の自身を恥じたが、彼は昨年、日本建築学会大会学術講演会やシエル・空間を専門とする研究セミナーで成果を発表し、受賞している。つまり、建築の新たな可能

性を広げる、野心的な研究として高く評価されているのだ。

就活は公共建築物の構造設計で実績のある設計事務所を本命に、

「東京スカイツリーのように構造的に美しいと感じられる建築物を将来、手がけられれば」と話す。そして、国内外を問わず高度な建設技術が身近で感じられる近代建築物を中心に、著名なものを実際に見て回りたいとも。

どこまでもストイックな学徒という勝手な印象は、次のひと言で変わった。「ピアノの発表会で、中島みゆきの『地上の星』を演奏します」。この号が発売される頃、KITに近い地元の文化会館ステージに、スポットライトを浴びながら弾く福森さんの姿がある。

金沢工業大学
石川県野々市市扇が丘七一
電話番号(076)248-1100